

司式 長原 光
奏楽 中井喜久子

前奏：「我汝に呼ばわる、主イエス・キリストよ」(D. ブクステフーデ)

招詞：沈黙してあなたに向かい、賛美をささげます。シオンにいます神よ。あなたに満願の献げ物をささげます。(詩65:2)

讚美歌 17「聖なる主の美しさ」

交読 詩編 30 編

01【賛歌、神殿奉獻の歌、ダビデの詩。】

02 主よ、あなたをさがめます。あなたは敵を喜ばせることなくわたしを引き上げてくださいました。

03 わたしの神、主よ、叫び求めるわたしをあなたは癒してくださいました。

04 主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ/墓穴に下ることを免れさせ/わたしに命を下さってくださいました。

05 主の慈しみに生きる人々よ/主に賛美の歌をたい/聖なる御名を唱え、感謝をささげよ。

06 ひととき、お怒りになっても/命を得させることを御旨としてくださる。泣きながら夜を過ごす人にも/喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

07 平穏なときには、申しました/わたしはとこしえに揺らぐことがない。

08 主よ、あなたが御旨によって/磐の山に立たせてくださったからです。しかし、御顔を隠されると/わたしはたちまち恐怖に陥りました。

09 主よ、わたしはあなたを呼びます。主に憐れみを乞います。

10 わたしが死んで墓に下ることに/何の益があるでしょう。塵があなたに感謝をささげ/あなたのまことを告知らせるでしょうか。

11 主よ、耳を傾け、憐れんでください。主よ、わたしの助けとなってください。

12 あなたはわたしの嘆きを踊りに変え/粗布を脱がせ、喜びを帯としてくださいました。

13 わたしの魂があなたをほめ歌い/沈黙することのないようにしてくださいました。わたしの神、主よ/とこしえにあなたに感謝をささげます。

聖書 出エジプト記 14章 19～25 節

19 イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを歩き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、20 エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。21 モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。22 イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。23 エジプト軍は彼らを追い、ファラオの馬、戦車、騎兵がごとく彼らに従って海の中に入って来た。24 朝の見張りのころ、主は火と雲の柱からエジプト軍を見下ろし、エジプト軍をかき乱された。25 戦車の車輪をはずし、進みにくくされた。エジプト人は言った。「イスラエルの前から退却しよう。主が彼らのためにエジプトと戦っておられる。」

聖書 ヨハネの黙示録 21章 1～4 節

◆新しい天と新しい地

01 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。02 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。03 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、04 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

愛と恵みに富み給う主イエス・キリストの父なる御神さま、あなたの聖名を賛美致します。今朝、降誕前第6主日礼拝を特別伝道礼拝としてあなたに献げることが出来ますことを感謝致します。あなたは私たちの地上の歩みをつぶさにご覧になり、あなたを信ずる信仰をお与えになり、再びあなたの下へと礼拝を献げるためにここに呼び集められました。感謝を申し上げます。

私たちの歩みはまことに拙く、罪を犯しつつ歩みを為す者です。何時も私自身があなたよりも先立ち、あなたの語られる聖書の御言葉を正しく捉えられずにおります。私にあなたに何が出来るかを考えるあまり、あなたがどなたであり、あなたの支配される新しき世界がどのようなものであるかを問うことから益々遠ざかってしまいます。どうか、主よ、私たちの罪をお赦し下さい。聖霊の導きによって、あなたの御言葉を正しく読ませてください。御言葉の中に私をではなく、あなたを見出すことを得さしめてください。

この世界には様々な苦しみ、悲しみが、絶望に陥り、虚無に囚われ希望を見出せずにいる多くの悲慘があります。また、あなたの聖名のゆえに苦しんでいる多くの方々がおられます。これら多くの困難は人の知恵によるものです。どうか主なる神さま、この世にもう一度目をお向けください。あなたの救いが明らかにされますように。あなたの慈しみが永久に絶えることのないことを見させてください。特に政治をはじめ指導的な立場にある人々を、良い正しい判断を下すことが出来ますようにお導き下さい。あなたが聖霊をもって平安をお与えくださいますようにとお祈り致します。

私たちの教会には様々な課題と共に試練が与えられております。どうか神さま、御旨を求めつつあなたの宣教の業に取り組んでいくことが出来ますように聖霊の導きを切にお祈りいたします。

今朝は特別伝道礼拝を献げようとしております。左近豊先生をお遣わし下さったことを心より感謝申し上げます。先生に聖霊を注ぎ御国の消息を十分に語ることが出来ますように上よりの導きをお願い申し上げます。

本日はzoom配信により、また昨日結婚された若いお二人をはじめ、多くの兄弟姉妹と共に礼拝に与ることが許されましたことを感謝いたします。どうか聴く私たちに心を開き新しき世界を見ることを許されますように。

あなたが礼拝の真中に立ち導いてくださいますように。そしてまた左近先生をお送り下さった美竹教会の礼拝の上にも私たちと変わらず豊かな御顧みがありますようにお祈りいたします。

礼拝後には拡大求道者が予定されております。どうかその会もあなたの祝福の内にありますように。どうかこの礼拝があなたに献げられるものに相応しいものとなりますように。

このお祈りを主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌 56「主よ、いのちのパンをさき」

講壇：「割かれた混沌の先に」 左近 豊

皆さんおはようございます。オンラインで礼拝を献げておられる方も共にこの場所で礼拝を献げることが出来る幸いを感謝致します。佃先生、鮎川先生。そして伝道委員の皆さんの準備と祈りに支えられながら今日の備えを為して参りました。特に伝道委員会の長を為されております長原長老、

もう半年以上前にお声がけを戴き、今日の“特別伝道礼拝、拡大求道者会で、是非御言葉を通して今の時代に向けて御言葉を味わいたい”との思いを戴き備えて参りました。宗教が敬遠され忌避される現代社会において、キリスト教、および、信仰とどう向き合うのか、という大事なテーマを巡って今日は一緒に御言葉に聴き、伝道の根幹にあるメッセージを味わいたいと思います。礼拝で御言葉を共に聞き、拡大求道者会で皆さんと大いに語り合いながら、私の中にはエマオ途上、復活の主と出会い、イエスの言葉に心が燃えた弟子たちの想いを皆さんと共有したいと願っています。

論壇時評(朝日新聞)に、政治学者宇野重規先生のアメリカ大統領選挙を巡っての10本の論説に、森本あんり(東京女子大学長)先生の二つの論説が取り上げられていました。アメリカ合衆国の妥協なき対立が起こっている現状と、その思想的背景について論ぜられたものです。自分がどういう立場にあるのか、どういう世界観を持っているのか、どういう宗教観を持っているのか、どういう性的(?)なアイデンティティを持っているのか、それを巡っての対立、その中で“自分こそが正しい”という抜き差しならぬ思いが敵対へと行き着く。トランプ氏を支持する宗教勢力、いわゆる(イスラム教)クニニ派と呼ばれる人たちかと思うが、宗教勢力もある、数の正義と自分たちの正義を取り違える、履違えて自分の正義を絶対化する動きがアメリカ合衆国内で強まっている。“自分たちの意見が正しい、これが神の正義だ”という仕方ではこれを確信・信じ、それに相容れない納得できないものは受け入れない。そうすると信じて起こるはずのことが起こっていない現状、“自分たちの思い通りに事が通らない、これはもう相手方の敵が何かを仕掛けている”という陰謀論が強まって行かざるを得ないという分析で、なるほどと思わされた。

聖書の本当に語っていることは何なのか、自分が聞きたいことだけを抜き出して聴くのではなく、聖書が本当に語っていることは何なのか、そのことを私たちは忘れていないだろうか。聖書が語っていることよりも自分の信念、正義感の後ろ盾となってくれる聖書の言葉を抜き出して、それを振りかざして自分たちの正義を絶対化する動きは、現代のアメリカ社会だけでなく、ロシアでも、あるいは聖書の舞台であるイスラエルにおいても、またヨーロッパ各地の聖書の宗教、聖書の信仰をベースにしているはずの地域においても強まっている。これは決して人ごとではなく、また聖書にそれほど親しみを持つ人が多くはないこの日本の社会の中にも、私たちの間にも起こっていることも知れぬ。今こそ、聖書が何を語っているのか真摯に耳を傾けて神の御前に正気に返る、あのゲラサの地で自らを見失うだけでなく社会的な事にも相容れず、墓場に鎖でつながれていたあの方がイエスと出会ってまっとうな正気に立ち返った(マコ5:1-20並行)、そのような仕方でもう一度御言葉の前に謙^{へりくだ}り、また御言葉に聴く、そのときは正気になる、そのようなことを思わされる。

個人的な経験だが、神の言葉に打たれた——今なお打たれ続けていると言っただけでも知れぬ——雷に打たれるが如く聖書の言葉が私の魂を揺さぶった原点、それはもう30数年前のことになる。牧師になる志が与えられる大きなきっかけでもあった。1990年秋、59歳、通常ならもっと生きていて欲しかった旧約聖書学者をしていた私の父(左近淑)がくも膜下出血で突然逝去した。その父がその数年前、2年間、或る地方の教会で旧約聖書についての講演をした。その時の音声テープをその教会の牧師先生が“是非聞け”と送ってくれた。それを聴いたとき、テープの中の父の声を

通して旧約の御言葉がストレートに響いて来た。旧約聖書の語る語りかけが心に刺さった。何故か。現代を鋭く抉る言葉が旧約には充ち満ちている。古い紀元前10世紀、それ以前の言葉としてだけでなく、今私たちに語りかける、聖書独自の切り口であるが世相を鋭く俯瞰して見せる、これに心震わせられた。旧約聖書が証しているその神さまが、旧約聖書の中で読む私たちに語りかけられておられるこの神さまが、新約聖書においてイエス・キリストに継承された、イエス・キリストに受肉された。具体的な仕方では私たちの前に神の言葉が顕れてくださった。そして今、この時代、聖霊によって、熱情をもって私たちに臨んでおられる、そのことを心躍る思いで聴いた。その旧約聖書の語りの力、旧約だけではなく、旧新約聖書、そして聖書の持つ私たちへの語りの力に抗いようもなく打たれて、翌年春、私は神学校へと進んで行った。私は4世代にわたってクリスチャンホームで育った宗教4世。違和感がないわけではないが、私が育っていく中、見渡すとキリスト教音楽、オルガンを演奏する母のキリスト教関係の音楽、楽譜、レコード、父の集めた聖地写真集、聖書関連図鑑、祖父—聖書学関係考古学者—の家にはパレスチナの古いランプなど、そういったものが眼を上げればどこにもある環境、聖書の世界がこんなにも豊か、広く、深い、そのような中、エイトス(ἔθνος[仕来り・慣習])の中で育てられてきた。学校は全て公立、権威主義の学校ではなかったため、何処か自分がクリスチャンであることを隠した現代版隠れキリシタンとして生きてきたが、聖書のことをどこか分かった気になっていたのも事実であった。どこか冷めていた所があった。だが父の死をきっかけに聖書の語りかけに打たれた。その時に^{ほとぼし}逆のように神の言葉に魂が揺さぶられる、揺さぶられるとそこに軋みが生じ、熱が発せられる、そして神の言葉が内に燃える炎のように感じられた。そんな出来事が30数年前にあった。そこで読まれていた聖書箇所、それが今日皆さんと一緒に読むことが許された出エジプトの出来事であった。

“杖を天に向けて挙げながら、その手を海に向かって差し延べたモーセ、その後ろにエジプトから出てきたイスラエルの民が沢山いる”、私たちがまた、この聖書の民と共に世々の聖徒らと一緒に、モーセの肩越しに起こる主の御業を見る事へと招かれている。“高く挙げられたモーセの杖、そして差し延べられた手の向こうに、闇夜を貫く光、水と水が分けられる、そして「乾いた所」、海の中に通されて行く”、それを遙かに臨み見る、これが今日私たち招かれている所である。

出エジプトという出来事のクライマックス、“葦の海の奇蹟”と呼ばれる場面、今日読んでいただいた少し前のところからこれが物語られ、そこを見ながら(話を)追っていきたい。『奴隷—「私たちを奴隷の家、エジプトから導き出された。(出13:14)—』、つまり人間の尊厳など全く考慮されない、疲れて休んでいれば鞭打たれ、倒れて動かなくなれば殺され見捨てられ、社会の歯車、磨り減って使い様が無くなればポイと捨てられ別の歯車に換えられる、人間が人間であることを許されない奴隷という立場、これは紀元前13世紀辺の出来事のように考えられているが、そういう中に居た、飼いや殺し、食べる物とある程度雨露をしのぐ場所は与えられたとしても、苦悶と苦役に日々追いまくられる、本来人は神の似姿として造られた、神に或る部分等しい者として神とコミュニケーションが取れるものとして造られたはずの人間が、その人間性を剥ぎ取られて、天地創造の秩序の中に人間の創造はあるはずの創造の秩序が歪められていた場所、そのエジプトから導き出され、引っ張り出されて自由というものへの一歩を踏み

出したそういう場面です。

ところがその自由への一歩、一難去ってまた一難、行く手を阻んで目の前に海が立ちはだかっていた、海が横たわっていた。自由への一歩を歩み出したらそれから先をすることが出来ない海のイメージ、色んなイメージをお持ちかも知れないが、聖書の世界では「海」は人間にはどうすることもできない自然の圧倒的な力、聖書だけでなく古代オリエント世界、メソポタミアの色々な話がある中でも「海」は基本的に「混沌」の象徴として描かれている。これは私たち島国住む者にとって意外なこと、海は命の源でもあり、この海を渡って文化に触れる、大海原は恵みをもたらす、外の世界へ開かれた窓口、豊かな命の源というのが私たちの海への認識かも知れない。けれども同時に、海は何時もいつも穏やかなものではない。荒れ狂い猛威を振るう轟き砕け散る波、大波となって親しい人を呑み込む、広がりある社会を寸断し、積み上げられてきた文化を呑み込んでいく、文明を深淵の底へと引き釣り混んで根こそぎに滅ぼし得る脅威でもある。そのことを、旧約聖書詩人を知っている。東日本大震災から今年で13年、間もなく14年経とうとしている私たちは痛いほどそのことを味わった。ですから海が持つ混沌との連なりを私たちがどこかで知っている。聖書の世界が見ている海というものを私たちは想像することが出来る。

ハーバード大学で聖書の研究をしているユダヤ人学者レベンソン (Jon D. Levenson) さん、古代メソポタミアの文献を丁寧に研究し、それと旧約聖書の色々な事柄を比較したりとかをされている方だが、或る研究書「あとがき」で混沌の問題を記す。聖書に出て来る混沌を象徴しているのは海、それを現代に掘り下げれば、それは例えばジェノサイド、アウシュヴィッツの出来事などにそれが見られるのではないか。今はそのイスラエルがガザでジェノサイドと呼ぶかどうかは別として大虐殺を行っている。その大虐殺を誰か一人の責任とか、あるいはそれに加担した指導者たちを悪人に祭り上げて全てだと断罪して解決する、だが本質は何も解決しない。異質なものを排除する思い、それも極限状態に追いやられたときに、これを理路整然とやってしまう、それは誰も持っているものではないか。もし旧約聖書が語っている「混沌・海」とその驚異、破壊の力を現代に私たちが味わうとしたら、それは他者を殺してでも排除する、それが大きな仕方で為される、そこに現れていることと重なり合うのではないか。どす黒い闇にまみえる海、それが何時の時代に世界の淵をしぶとく蝕んでいる、旧約聖書の創世記、詩編やヨブ記の中にもこの混沌の問題、海の問題は繰り返し、繰り返し出て来る。これらをレベンソンさんは紐解きながら、いったい聖書が何を現代に語りかけているかに耳を澄まそうとそう促す。

話題を換えますが、アメリカの公民権リーダー、マーティン・ルーサー・キング (Martin Luther King Jr.) 牧師が、この個所で説教をしている。『海辺における悪の死』(?)、混沌、あるいは海が象徴する混沌、そこには悪の問題というものも潜んでいる、そして彼は「海辺における悪の詩」(?)と題する説教を残している。今日の個所に基つきながら、アメリカ南部のファラオたち、1950-60年代のことだが、60年経ってこのファラオたちが復権してきているという事にも私たちは忸怩たる思いを感じる。ですからマルティン・ルーサー・キングの説教は、今なお、響いてくる。この南部のファラオたちのもとで人種隔離政策、あるいは表向きは肌の色の違う者を分離する、そこには何の優劣もないという前提でやるが、実際にはそこに優劣が起り、差別が起り、偏見が起り、経済格差が生じてく

る。非人間的な抑圧と不正な搾取、その問題がこの出エジプトの“エジプトから出る”と言ったとき、そうした非人間的な抑圧や不正な搾取からの自由、そのために「裂かれた海」があった。その「裂かれた海」を渡って「乾いた地」を通ってエジプトから、あるいはファラオの支配から導き出された人々に^{なぞら}えながら、この聖書の個所、現代の社会の中で“命の言葉”として、そして“希望の言葉”として語る、そういう伝統の中にある個所であります。

私たちの今をむしばむ海、混沌、潮の満ち引きのように様々な秩序、価値観が揺らいで、綻んで、足元の礎が揺らげば揺らぐほど、その不安定さに眩暈を生ずる。そして迫りくる不安にふと気づかされる時、私たちはもう一度、この聖書の個所で興っている出来事に、しっかりと耳を傾けたい。モーセの肩越しに、差し伸べた手の向こうを見ながら、しかし、この海が裂かれていく、混沌が引き裂かれていく、それを見るかどうか。そんな語りかけを今日の出エジプトの個所は私たちに問いかけています。

この物語は背後から一旦は奴隷を解き放つことに同意したにも拘らず心変わりして、実際エジプトで奴隷の人たちが担っていた様々な仕事、これは所謂、エッセンシャル・ワーカーと言われる、それなしには社会が回って行かない仕事、でもエジプトのエリートたちはやらない仕事、そういう所に居た人たちがごっそり抜けるわけであるから、即座に社会は回らなくなる、パニックとなり、“出て行け”として出したのだが、現実には気づかされファラオは軍勢を差し向けて、もう一度聖書の民を引き戻そうとする。この世の圧倒的な力をもって、権力の象徴を持っているファラオが猛然と迫ってくる。八方塞がり、鬼気迫りくる中で人々は絶体絶命のピンチに陥る様が今日の個所の前の所に書かれている。

土埃があったかどうかかわからないが大変な軍勢なので音もしたであろう。追撃してくる軍勢が、前方に横立っている大海原、葦の海は地図で見るとそれほど大きくは見えないが、実際には対岸が見えないほどの海、この大海原。にっちもさっちもいかない行く手を閉ざされて、“もう駄目だ、万事休した”と。そして呟き始める。“エジプトで墓がないからここで死ぬことになるのか(出 14:11)”，と言って、わが身の運命を呪いながら絶望の淵で、モーセを、そして神を責める。しかし神の言葉を彼らは聴く。“恐れてはならない、落ちていってしっかり立って、震える膝をしっかと定めて、そこに立ち、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなた方は今、エジプト人を見ているけどもは永久に見ることはない。主があなた方のために戦われるのだ、あなた方は静かにしていなさい。(14:13-14)”と。危機の中で私たちは神の沈黙を、“なぜ何も為されない、仰られない、黙っておられるのか”と問う。けれども神は、“沈黙するはあなた方だ、ただ黙って見ていなさいと、救いの御業を”と。そして今日の個所(19節以下)へ。

迫りくる絶望の力エジプト、そのような中“エジプトの陣と神の民の間に立ち込める真つ黒な雲、そして闇夜を光が貫く(14:20)”と。この出来事は、旧約聖書の1頁、天地の創造の出来事(創1:1-5)を思い起こす。

- 1 初めに、神は天地を創造された。
- 2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。
- 3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。
- 4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、
- 5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

ここに「混沌」も「深淵」もある。地が混沌とし闇が深淵の面にあったその中に光が創造された出来事をこの出エジプトの場面でもう一度見ることになる。

今日の個所、もう少し気を付けて見ていきたい。

夜通し強い「東風」とある。「風」はヘブライ語で「ルーアッハ(רוּחַ)」、神は夜通し強い東風・ルーアッハをもって海を鎮ませたので「海は乾いた地に変わり、水は分かたれた」と。「神の風」、「強い東風・ルーアッハ」、これは『神の霊』のこと。「霊」と「風」はヘブライ語では同じ「ルーアッハ」を使う。「強い東風」とも訳されるが、「神の霊がそこに吹き、水の面を吹き抜けて、海は乾いた地に変わり、水を分けられた」出エジプトの出来事、これも創1:6以下、天地創造の二日目の出来事と響き合う。すなわち、

“天の水は一つ所に集められ、乾いた所が現れよ(創1:9)”と言われたあの「乾いた所」、「水の中に大空あれ。水と水を分けよ(6節)」、「神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた(7節)」、「神は『天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。』(9節)」、「神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた(10節)”。この「神の霊・神の風」が水を分け、「乾いた所が現れよ」と言われ、そこを「地と呼び」、「水の集まっている所を海と呼ばれた」、「光と闇」だけでなく「水を分ける」という御業もここに記されている。

出エジプトの出来事は抗い難いファラオの力からの自由の道行きを書いているが、それは更に深いところでは“新しい天地創造”なのだ。モーセの肩越しに見ていることは、それは只、「今、海が分かたれ、そこを通る」という話に終わらない。実は“新しい天地創造の御業が、今、この場所で起こっているのだ。混沌を切り裂く神の創造の力が、まさに救いと新たな存在と呼び出す力と重ね合っで目の前で起こっているのだ。混沌と海のもたらす死、あるいは絶望から、命、希望へと導いていくものなのだ”と。

細かいことになって恐縮だが、今日開いていただいている出エジプト記の箇所、特に21節、22節の所に目を落としていただきたい。聖書は一つの言葉にすごく大事な意味を込めることがあるので、そのところをご一緒に見ていきたい。21節「夜通し強い風(ルーアッハ)が海を押し返し、海が乾いた地に変わった。水は分かたれた」に登場する「乾いた地」は、16節、22節の「乾いた所」とは違う言葉が使われている。「地」も「所」も日本語では漢字一文字で読み飛ばしそうになるが、類義語と言われるものだが、両者は全然違う。「乾いた地(ハラーパー(הָאָרֶץ הַיְבֵשָׁה))」は聖書のどのような箇所に出て来るか、というと、先ほどの天地創造の命に立ち満ちた場面ではなく、その対極にあるように、干上がった荒涼とした場所の表現として使われている。戦乱や審きがあって破壊の後の荒れ果てた様子を言い表す。激しい熱風が吹き付けて海が干上がっている、それまでの在り方が完全な終わりを告げている地、それが「乾いた地」。それに対して人々が行く道は、天地創造の豊かな命、芽生えさせる「乾いた所(ヤバシャー(בְּשָׂרָה))」、ここ一行の間には大変なことが起こっている。

★参考★

【21節「乾いた地」ハラーパー(הָאָרֶץ הַיְבֵשָׁה) [乾燥地]】用例:旧約8例、創7:22、出14:21、ヨシュ3:17、17:4:18、II王2:8、エゼ30:12、ハガ2:6。

【16.22節「乾いた所」ヤバシャー(בְּשָׂרָה)】用例:旧約14例、創1:9,10、出4:9、14:16,22,29,15:19、ヨシュ4:22、ネフエ9:11、詩66:6,95:5、イザ44:3、ヨナ1:9、13、2:11。

二つの類義語を使って、しかも対称的な意味合いを含んだ言葉を並べることで徹底的な海の終わり、混沌の終焉、それを経た後の新しい豊かな創造の御業の中を人々は歩もうとされていることが語られる。死の後も新たな命。海が裂かれる時に神の激しい熱情の風に海は干上がり「乾いた地」に変貌する。混沌の力、神の力によって徹底的に滅ぼされる。追い迫るこの世の支配者の軍勢、海に吞まれて跡形もなく死を滅ぼし尽くす神の力に吞

み込まれた。嵐を静め、この世の権力者を無力にし、絶望の淵でこそ出てくださる神の姿。ここに証しされる混沌を切り裂いて「地」の道を通される神、その似姿を、杖を挙げて前を指すモーセの肩越しに私たちは見る者とされている。

エジプトの軍勢が衰えではないか、と感じられるかもしれぬが、この物語の前を見て来るとそんな甘っちょろいものではないことも分かってくる。“混沌の力に覆い尽くされた世界の中に命の道が通された”、それが今日の個所のメッセージ、その道は約束の地へと向かうことになる。

それまでに色々あって40年間があるのだが、そこに入る直前に、所謂「約束の地」を向う岸に見ながら、今度は堤を越えんばかりの激流逆巻くヨルダン川に行く手を阻まれることになる。その手前でモーセは死に、後継者ヨシュアが導いてヨルダン川を渡ろうとするが、ヨルダン川が立ちはだかつて約束の地に入れない。このとき上流で堰き止められ、そこに「乾いた所/干上がった川床(ハラーパー)ヨシュ3:17」を人々は渡って約束の地へ入る。新たな天地創造、かつて葦の海で起こった出来事を思い起こしながら新たな神の御業の場へと人々は導かれ入れられて行く(ヨシュ3章)。

聖書はそのような仕方で事柄が更新され、なおその語りは続いていく。差し伸ばされた手の先に、ヨルダン川での出来事も私たちは見ることになる。それは旧約聖書だけに留まらない。そのヨルダン川に御自ら身を沈められ、或る意味水の中に象徴的仕方で死をその身に負われたイエス・キリストに洗礼者ヨハネが洗礼を授けていたその場面(マタ3:13-15、並行)、イエス・キリストが自ら上がられると、霊(Πνεύμα ἁγίου) [霊・風]が水の上に降った。マルコはこれを「天を裂いた」キリストにおける一つの新しい出来事と語る(マコ1:10)。キリストにおける古い秩序が終わって、まさに新しい創造の御業、そこから新約聖書において説き起こされていくことになる。イエス・キリストの最初の出来事の一つが、ヨルダン川での洗礼ということになるが、ヨルダン川に身を沈められて上がってくるや天が裂けて、そこから神の霊が降った。このイエス・キリストの御生涯を新約聖書は語っている。その中で一番大事なキリストの十字架の死、それによって私たちの命に立ちはだかる「海」が干上がる。キリストの復活の命によって結ばれる救いの道が通される、このことが新約聖書、特に福音書で語られていることである。キリストの十字架の死、そして復活の出来事は、混沌と悪と絶望の淵にまで、イエス・キリストが陰府にまで下ってくださり、その場所に到達されてしかもなお、そこから復活されるわけであるから、私たちが絶望の窮みにある所にもまた、神共にいます場所に換えられる出来事と新約聖書は語る。“救いの道は、陰府さえも徹底的に干上がらせ、それを切り裂いて命の道を開かれた”、これが新約聖書、福音書の語っていることである。

そして新約聖書の最後、ヨハネの黙示録、今日読んだ箇所であるが、この様に書かれていた。「またわたしは、新しい天と新しい地を見た。」見ているのだ。「最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もない」。初めて読んだとき、何でここに「海」が出て来るのだろう思ったが、もう、この旧約聖書から新約聖書にかけて神さまの御業をモーセの肩越しに見てきた私たちは知っている。死の力、混沌の力、これらが最早無くなる。「そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。“見よ、神の幕屋が人と共にあり、神は人と共に住み、人は神の民となる。神は御自ら人と共にいて、その神となり、目から涙をことごとくぬぐい去ってくださる。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものは過ぎ去ったからである。”」遙かに望み見る。今はまだ悲しみもある、死もある、嘆きもある、

報告：略

後奏：「まさに時いたりなば」(H シャイデマン)

そして混沌のように見える中に私たちは生きている。しかし、内村鑑三も言われたが、“この世界は悪が支配する世界ではなく、神が支配する世界、絶望が覆う世界ではなくて希望のある世界だと信じるかどうか。そしてその信じて生きた生涯を後世への最大の遺物として残していくのがクリスチャンの最大の喜びだ”と。黙示録に記されているこのヴィジョン、“新しい天と新しい地、もはや海もない”、その神の御業を遥かに臨み見ながら信じて歩み通すか、そのことがここで私たち励まされながら問われている。海の前に佇み川に行く手を阻まれて混沌に翻弄されている私たち、だが、神の風・聖霊は吹いている、海を干上がらせて向う岸へと渡らせられる神の語りかけは今日も響いている。来週も響いている。これからもこの礼拝の場で、繰り返し、繰り返し響き続ける。ピクネーム(?)を忘れたとしても、この場所にかえってきてもう一度、くぐもってしまったその眼差しを洗って頂いて、もう一度この幻を見る者とされる。私たちは杖を高く挙げ、差し伸べられた手の先に海を裂き、干上がらせ、死を滅ぼし、救いの道を通された十字架と復活のキリスト、清かに見る者とされて日々の歩みに遣わされて参ります。

祈りを献げましょう。

教会の頭であられるイエス・キリストの父なる御神さま、聖書を通し、そして信仰の先達たちの歩みを通し、信じて仰ぎ見るあなたの賜る救いと希望を、どうか堅くしてくださいますように。今日、この場所に集うた一人ひとり、昨日結婚をされ新しい歩みを始められた方々も居られる、どうぞここにおられる全ての方々の生涯と共に、祝福してくださいますように。

この祈りを主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。
アーメン。

讚美歌 467「われらを導く」

献金・感謝(山本典子)・主の祈り(讚美歌21 93-5A)

聖なる神さま、今朝は特別伝道礼拝として、左近先生をお招きし、このような恵み豊かな礼拝を献げられましたことを心から感謝致します。

新しい方々がいらして下さっていると思います。感謝致します。どうぞ、その方々と共に、これからも、この教会と繋がって、私たちが歩んで行けますように。先生から戴いた御言葉をこの一週間糧とし、聖書から聴いた言葉を私たちの血と肉として混沌の先の希望を信じて歩んで行く一週間となりますように。

この礼拝に集っている方、また夫々の場で礼拝を守っている方の中に、喜びの中にある方、悲しの中にある方がいらっしやると思います。夫々にあなたが寄り添ってくださいます。

あなたから十分に頂戴したものの中から感謝と献身の徴として今御前に献げました物を、どうぞ聖めてお使いください。この一週間、イエス・キリストが教えてくださった「主の祈り」を共に祈りまして、力強く歩み出させてください。…アーメン。

派遣：92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣：平和の地にこの世へと出て行きなさい。主なる神に仕え、隣人を愛し、主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。願わくは、主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき御交わりが、ここに集うたお一人お一人、またオンラインで礼拝参加をしている全ての人の上に、今も後も永遠に伴いますように。アーメン。